

## シンポジウム 4

輸血細胞治療 2 「未来につなげる輸血医療を目指して～さまざまな視点から効率化を考える～」

### 輸血検査に関する業務効率化

◎田之頭 敏志

鹿児島医療生活協同組合 鹿児島生協病院

臨床検査技師には正確かつ迅速な検査業務が常に求められている。その中で「効率化」という命題も現場には要求される現状もある。しかし「輸血医療の安全性」が損なわれてしまったら、大きな問題につながる。当院で実施している「輸血検査に関する業務効率化」と今後につながる「輸血検査に関する業務効率化」を報告・検討する。

全自動輸血検査装置 Wadiana Compact での輸血関連検査の運用を2014年10月より開始した。試験管法からカラム法への変更は輸血検査の大きな改革に繋がった。「輸血医療の安全性」と「輸血検査に関する業務効率化」とともに進められている。

当院での今後につながる「輸血検査に関する業務効率化」では以下の2点が考えられる。

コンピュータクロスマッチでは、人為的な誤りが排除でき手順も合理化できるため、ABO 血液型不適合輸血の防止、迅速な血液製剤の提供、試薬や器具を使用しないことによる経済効果と業務軽減、輸血検査に不慣れな技師の精神的負担の軽減などが期待できる。しかし「供血者赤血球の DAT 陽性」や「低頻度抗原に対する抗体」などで交差試験が陽性になることも考えられる。「輸血医療の安全性」の最終確認として交差試験を位置付けて考えているため、今後更なる検討が必要である。

不規則抗体検査酵素法の省略では、臨床的に意義のある不規則抗体のほとんどが IAT で検出され、酵素法のみで検出される抗体は臨床的意義の低い抗体と考えられている。また酵素法は非特異的な凝集を呈することがあり、判定に苦慮する場合がある。しかし当院での不規則抗体検査では酵素法のみで陽性が多くみられる。「輸血医療の安全性」を考慮し、更なる検討が必要である。

「輸血検査に関する業務効率化」について検討を行った。各医療機関で「業務の効率化」について積極的な検討は必要と思われるが、特に輸血業務については「安全性」が大きな課題となる。運用は各医療機関により異なるが、不適合輸血を防止するという目的を果たすために各々が輸血検査体制について検討する必要がある。